

民俗的陰陽道研究の課題

はじめに

本稿は陰陽道を民俗研究上、どのように位置づけるかについて、従来の研究史を検討し、さらにそれをふまえながら方法論を模索しようとするものである。ここではまず、これまでの民俗研究における陰陽道の位置づけについて、主として柳田国男と折口信夫の研究活動から抽出して検討を加える。これは柳田、折口の対象設定と研究成果とが日本の民俗学を規定している部分が極めて大きいとされているからであり、それを意識して両者の研究の達成と問題点とを確認することで今後の民俗研究において陰陽道をとらえていく可能性を探る必要があると考えるからである。さらに近年の陰陽道研究を通覧して、改めて民俗学的に陰陽道をどのようにとらえ、調査研究を進めていくべきか、基礎的認識と方法とを提示してみたいと考える。

最初に陰陽道研究の出発となった斎藤励の『王朝時代の陰陽道』（一九一五）について確認しておこう。これは、斎藤が明治四二

小池淳一

年（一九〇九）四月に脱稿した東京帝国大学の卒業論文「王朝時代に於ける陰陽道一斑」をその没後に、柳田国男が甲寅叢書第六編として刊行したものである。陰陽道に関連する史料を集成した『古事類苑 方技部』（一九〇九）が世に出る以前の段階で、史料を博搜しての執筆であった。全体は一〇章からなり、陰陽道の伝来から官制上の位置、天文、暦占、筮式、祭祓などについて論述し、古代社会における陰陽道の様相をよくとらえた著作である。これによって陰陽道の研究は、はじめて単行の書物を持ったことになる。しかし、それ以降、本書がその後、二度も復刻されたことからもうかがえるように個別の論文や研究ノートなどを除くと、陰陽道を主題とした研究書は全く刊行されなかったのである。斎藤の著書の研究史上に占める重さと陰陽道研究の停滞とがうかがえるであろう。

この『王朝時代の陰陽道』が、長く陰陽道研究の水準を支えたことになる。民俗研究の領域でもそれは例外ではないようである。柳田はこの著作の刊行に努力したが、陰陽道を正面から問題



とすることはほとんどなかった。従って民俗研究における陰陽道の追究はいくつかの断片的な言及に対する検討を行なわなくてはならない。

一 柳田国男の陰陽道観

柳田国男が日本民俗学を体系化していくなかで、陰陽道はどのように位置づけられ、検討されてきたのだろうか。民俗研究における陰陽道を考える上で、このことは、欠かせない視点であると考えられる。なぜならば、柳田は日本民俗学の創始者であるのみならず、現在の民俗研究の大部分の礎を築き、さらにどの領域においても一定の見通しと仮説とを提示しているからである。ここでは具体的に柳田の言説をひきながら、彼の学問のなかで陰陽道がどのように把握されていたかについてみていくこととする。⁽³⁾

まず、初期の研究における陰陽道の位置づけをみよう。柳田の民俗学の出発を告げるのは、『後狩詞記』(一九〇九)、『遠野物語』(一九一〇)、『石神問答』(一九一〇)の三部作とよく言われるが、そのなかの『石神問答』では書簡の体裁をとりながら、初期の柳田の陰陽道観が示されている。勝軍地蔵の信仰に関連して、「大將軍は陰陽道に因あり」(定本二巻六〇頁)と民間の信仰の因子として陰陽道を指摘し、「地方無知の人民は久しき昔より此信仰に侵染せりと云ふ推測は決して根拠無きに非ずと存候」(同頁)としている。さらに唱門師(唱文師、聖門師、シヨモジ)が近世には禁裏において正月一八日のサギチャウの儀式に奉仕すること、村においては卜筮祈禱を行ない、陰陽師、ハカセなどとも呼ばれたこと

が指摘されている(六二頁)。ここでは当時の民間における正体不明の信仰形態の源流の一つとして陰陽道が見出されており、その信仰を担った者として陰陽師の存在が注意されているのである。

この位置づけは大正期に入っても大きく変化することはない。

大正二年(一九一三)に発表された「所謂特殊部落ノ種類」では陰陽道は「禁厭祈禱及ビト占」を行なう「一種ノ魔術団体」に取り入れられる教義の一つとしてとらえられている(定本二巻三七七頁)。こうした把握は、陰陽道を宗教としてとらえるというよりも、実践のありように即してみていることと言える。ただし、ここで挙げられている「ハカセ」や「陰陽師」あるいは唱門師、院内などは明らかに中近世社会においては陰陽道とその管轄の領域に属する者であったのであり、そうした点からは、中世以降の肥大化し、庶民生活に浸透していった陰陽道の姿をとらえた指摘ということもできる。

さらに、陰陽師の活動内容については、「山莊太夫考」(一九一五)で「中世の博士が今日とは雲泥の、変な人體の者であつたこと、又陰陽師身上知らずなど言ひ、曆と祈禱の外に村里ではト占を以て生業として居たことも人のよく知る所である。唯此徒が多くの毛坊主と同様に、摩利支天や北辰妙見を本尊として奉仕し、単に土御門家の支配を受ける点のみを以て、普通の修験者と区別せられ得たことは、此迄あまり注意した人も無かつたやうに思ふ。」(七巻一六頁)と述べていて、支配体制上の位置づけの違いにかかわらず、実際の活動内容は毛坊主や修験と大差がないことが主張されている。

初期の柳田にとって陰陽師は毛坊主や巫女、修験などの一連の

庶民生活に大きな影響を与えてきた宗教者群の一つとしてとらえられており、その存在自体を強調すること、庶民生活との関わりとが重視されていたと言えよう。そうした点で大正五年（一九一六）に発表された「唱門師の話」（定本九巻）が、短かい論文ながら初期の視点を集約している。ここでは『石神問答』で指摘された宮中の三毬打への参加に加えて、千秋萬歳としての働きも指摘し、「足利時代の唱門師が一種下級の八力セ即ち陰陽師で、祈祷もすれば初春の祝言も唱へること、（中略）算置きと兼ねて歌舞遊芸を家の職とする……」（四三七頁）とし「之を要するに陰陽師と云ひ八力セと云ひ萬歳と云ひ院内と云ひ寺中と云ひ算所と云ひ或は単に太夫と云ひ又唱門師と云つても、此徒の生活状態又は社会上の地位に一々の区別があつたわけでは無（四三九頁）い、と強調している。いわば、史資料を丁寧にあげながら職能の面から陰陽道に携わってきた宗教者をとらえようとしているのである。

こうした独特の視点から、さらに幾つかの興味深い問題が提出されている。その一つは民間において行われた陰陽道は公家社会におけるものとは異なるのではないか、という指摘である。『石神問答』では「近世の所謂陰陽博士職は男子の世業にして 修験道にも女僧なく候へば 巫女の才を祀ること據なきに似たれども 奈良の朝以降政府の道教に対する態度は 曆法天文道を信仰と分立せしめ 前者を採りて後者を制限するを力めたるらしく候へば 公家の陰陽道と民間の礼拝とは著しく相異なるものありしなるべく 秦川勝が拳骨に値するもの比々として田舎を横行し 其行者には婦人多かりしことゝ想像致候へ定本一二巻一一五——六頁）とし、さらに陰陽道と女性との関わりも示唆している。も

つとも当時の柳田は陰陽道と道教もしくは陰陽五行説とを厳密に区別してはいないようで『石神問答』のなかでも中国において陰陽道と仏教との習合が行われているとしたり（定本一二巻九六——九七頁）、「山人考」（一九一七）でも「支那から入つた陰陽道の思想」が日本のオニに影響を与えたと述べている（定本四巻一七七頁）など、陰陽道の語で指し示そうとする範囲がかなり広く、良く言えば融通無碍であるが、実は無限定な使用方法であることは否めない。

広い視野から提出されたもう一つの興味深い問題は「アリ」を名前の中を含む宗教者の問題である。柳田は一九三〇（昭和十五年）に『文学』に発表した「有王と俊寛僧都」において、俊寛が鳥流しにあつたのちの様子を見てきたとする有王という説話の語り手の名に注意するなかで、一種の宗教的な語りを行なうものにつけられる名としての「アリ」を指摘し、「ト占を家の職とした陰陽道の人々に、在何といふ名の多いのはそれである。現在まで残つて居るのは津軽秋田の弘い区域で、アリマサと呼ばれて居るのは祈祷判断を業とする男子の総名である。」（定本七巻七七頁）と述べている。⁽³⁾

こうした宗教者への注目の一環として陰陽道を視野に入れてきた柳田の態度が昭和に入ると変化を見せ始める。一九二六年に発表された「年棚を中心として」では「歳徳神と云ふ名称の中世民間の曆書の影響であり陰陽家の怪しい輸入説が、単純な農民の考へ方を左右したことは争ひ得ないが、さればとて恵方といひ明きの方といふ語のみに由つて、春の初に來り祭らるゝ神までを、この民族と縁の浅い外国の神と見ることは出来まい。」（定本一三巻



二四六頁）といい、民俗事象に対する陰陽道の影響を軽視する二ユアンスが出てくる。

それは昭和十三年（一九三八）に刊行された中山徳太郎・青木重孝編『佐渡年中行事』に寄せた序文「島の年中行事」にも「所謂ほき陰陽道の歴史は、近世は殊に埋没しきつて居るが、これが田舎の精神生活に、多大の影響を與へて居ることだけは争へない。博士と名のつく者は大抵は門付け物よしの類に墮落しても、その知識のきれぐになつたものだけは、山伏も字び神主も字び、僧侶も一通りは心得て居る者が多かつた。（中略）今日流行して居る都鄙の俗信は、言はゞ安倍晴明の足の垢のやうなものが多いのである。それが相応に古くから入つて居たことは、佐渡にも痕跡があるので、私はいつもこの外来の異分子が、容易に見分けられる形で残つて居ることを喜んで居る。」（定本一三巻二九四―二九五頁）と表現されていることからもうかがえる。

ただし、ここでは重要な視点が示されている。それは陰陽道の知識は陰陽師ならずとも修験、神官、僧侶たちによつて知られ、運用されていたということの指摘である。陰陽師の系譜をひく者が、芸能や物乞いへとその職掌の中心を変えていった一方で、陰陽道の知識自体は、他の宗教に取り込まれ、命脈を保っていたことに注意が向けられているのである。

しかし、柳田の研究態度が大筋で陰陽道を軽視する方向に進んでいったことは仏教や中世以降の神道の軽視とともに固有信仰論、祖霊神学の形成のための手段として理解するべき偏向であり、それぞれの宗教と庶民生活との複雑で多様な交流の様相に対して冷淡に過ぎる民俗研究の潮流の原型となつたと考えられる。

『先祖の話』（一九四五）では「歳徳神といふ名称は、吉方明きの方の思想と共に、以前博士と呼ばれて居た陰陽師等の説に由つたものに違ひないが、それにしては其歳徳神の御姿までは、彼等は指示しようとはしなかつたのである。」（定本一〇巻四〇頁）といひ、「二十三夜塔」（一九五〇）においても月待ちの信仰について、仏法も陰陽道も手を出し世話を焼かうとしたのであつたけれども、その為に変つた部分は至つて少なく、大昔の心持はなほ明らかに伝はつて居る」（定本一三巻一六〇頁）とするのは、その端的な例である。

このように見てくると、柳田の陰陽道に対する姿勢は、明治から第二次大戦前までは陰陽師の活動と存在形態、さらにその影響に注意を向けていたのに対して、昭和に入つてから徐々に陰陽道の影響に対して否定的な見解をとるようになっていったと大まかにとらえることができよう。しかし、これからの民俗研究としてはどちらの視点からも汲み取るべきものがあるように思われる。即ち、初期の柳田の陰陽道に関する研究では、陰陽師の庶民生活の側からの意味づけの重要性や陰陽道の知識の担い手を陰陽師に限定しない視点が意義深いものとして浮かび上がってくる。また戦後の陰陽道を軽視しようとする立場には、それでも陰陽道が民俗事象と緊密に結びついていることを否定しきれない点に、更に綿密な考究の余地が残されているように思われるのである。

二 折口信夫の陰陽道観

次に柳田の影響を受けながらも、独自の民俗研究を進めた折口

信夫の陰陽道観を探ってみよう³⁾。折口が陰陽道をどのようなものとしてとらえていたかについては、彼の独特の文学発生論のなかによく表われている。特に文学の唱導性に注目するなかで重要な指摘がなされている。一九二七年に発表された「国文学の発生（第四稿） 唱導的方面を中心として」では「陰陽道の日本への渡来は古い事で、支那の方士よりも、寧ろ、仏家の行法を藉りて居る部分が多い。宮廷の陰陽道は漢風に近くても、民間のものは、其よりも古く這入つて来て、国民信仰の中に沁みついて居た。だから神学的（？）にも、或は方式の上にも、仏家及び其系統に近づいた呪禁師^{シヨモジ}の影響が沁みこんである。貴僧で同時に、陰陽・呪禁に達した者もあつた。」（全集一卷一七八頁）とし、陰陽道の伝来は仏教と習合しながらであつたことが指摘されている。さらにこの論考では、陰陽道の展開について「鎌倉以後になると、寺の声聞身等が、優婆塞姿であり、旧来の行者同様、修験者の配下について、此方面に入る者も出来た事は考へられる。山伏しになつた中には、陰陽師と修験者とを兼ねた、ことほぎ・禊ぎ・厄よけ・呪咀などを行ふ唱門師^{シヨモジ}もあつた事は疑ひはない。此方面に進んだものは、最、自由にふるまつた。」（全集一卷一九〇頁）と述べ、仏教に加えて修験道とも混じつていったと主張されている。こうした見解は先に検討した柳田の視点と共通するものがある。

しかし、陰陽道の存在様態と展開についてはさらに踏み込んだ示唆的な見解も示されており、この点は注目に値する。「年中行事」（一九三〇）では「日本の陰陽道には、宮廷の陰陽道の博士の司つたものと、民間の寺僧が司つたものがあつた。僧侶は支那に關して、直接に見聞した知識を持つてゐるので、支那の民間信仰

が寺に伝ひ、陰陽道と共に、仏教と区別することが出来なくなつてゐた。宮廷の陰陽道の博士は、事務に拘はつて、学問をも固定化させ、活気のないものとした。其為に、僧侶の側の陰陽道が盛んに行はれ、仏教と支那の民間信仰との融合した信仰も広まつて、盛んになつた。」（全集一五卷八九頁）といい、ここでは陰陽道が宮廷と寺院とで担われたこと、さらに後者の展開が重視されている。このことは同時期に慶応義塾で行なわれた「日本芸能史」の講義のなかでも述べられ、安倍晴明と芦屋道満との争いは宮廷と寺院との陰陽道の争いが投影されているのだ、と指摘している全集ノート五卷一一四頁）。

この仏教に入り込んだり、僧侶によつて担われたりした陰陽道という認識に基づいて神道史に対する発言も行なわれている。一例を挙げるならば、「古代人の思考の基礎」（一九二九）では「日本紀は、平安朝の初めから、漢学者によつて研究せられた。日本紀講筈と呼ばれてゐる。其中に、理会の為方に違つた要素が這入つて来てゐる。即、安倍晴明によつて知られた陰陽道^{ウツミチ}を、補助学科としてゐる。陰陽道には、漢学風のもの、と、仏教風のものがある。其為に、日本紀の解釈も、僧の畑に這入つて行はれ、仏教式の色彩が濃くなる。神仏習合と言ふ事は、仏教派が、日本紀を中心としてやつた事である。」（全集三卷四三三―四三三頁）という理解を示している。折口のこうした見解の細部については宗教史の立場から厳密に検討が加えられる必要があり、現在の研究の水準からすれば、正確ではない部分も含まれていよう。しかし、大筋においては首肯されるものであり、特に陰陽道の知識の利用や流通という視点からは、今日なお重要な見解ということができ

よう。

折口の民俗研究のなかで柳田と異なるとされてきたのは芸能史に対する関心であった。しかし、陰陽道の芸能史上の位置づけについては、初期の柳田の陰陽師に対する着目をよく受け継いでいるといえよう。例えば、今の萬歳は、声聞師から出てゐる。其声聞師は、陰陽道オンミヤミチから出てゐる。陰陽道は外来の信仰で、其に日本の信仰を混じたものである。陰陽師は、僧かと思ふと神主の様に見えるもので、京都の北畠・桜町村に住んで、春の初めに出て来ては祝福をして帰る。此が後に萬歳となつたのである。陰陽道には、反閉の式といふものがあるが、萬歳の反閉と同じである。今でも幸若は反閉ンバイを行ひ、土を踏みつけて歩くが、此は、土地の精霊を踏み押へるのである。幸若舞は、萬歳が叙事詩を唱へるものと考へればよい。つまり、声聞師によつて演ぜられた千秋萬歳センスマンサイの特殊な形に固定したもので、舞といひながら舞ふことの妙なものである。」(全集一二巻一七九頁)という見方は『日本文学啓蒙』(一九五〇)に収められた「室町時代の文学」と題する一九二六年の講義におけるものであるが、ほぼ同様のことが、一九四一年七月の公開講座における講義をまとめた『日本芸能史六講』(一九四四)でも述べられている(全集一八巻三六二頁)。さらに芸能の伝承において大きな役割を果たした宗教者として修験とともに陰陽師を重視することは、次のような指摘として結実している。

遠州や三州の北部山間に残つてゐる田楽や、其系統に属する念仏踊りや、唱門師風の舞踏の複合した神楽・花祭りの類の演出を見まして、もどきなる役の本義が、愈明らになつて

来た様に感じました。説明役であることもあり、をこつき役である場合もあり、脇役を意味する時もあるのです。翁に絡んで出るもどきには、此等が皆備つてゐるのでした。まづ正面からもどきと言はれるのは、翁と共に出て、翁より一間トキマ遅れて、此が正しいのだが、今は同時に、文言を、稍大きな声でくり返す役の名になつてゐます。此は陰陽師又は修験者としての正式の姿をしてゐるのです。説明役と同時に脇方に当ります。(「翁の発生」(一九二八)全集二巻四二頁)

こつして見てくると陰陽道に関しては折口も柳田とそう遠くない見解を抱いていたことが確認できる。折口は柳田の初期の見解を芸能史研究という領域で深化させていったと言つこともできよう。

その一方で、この柳田と折口の視座は、陰陽道と道教とを厳密に区分していないという弱点についても共通している。折口は道教と陰陽道とを同一視したり(全集ノート編二巻二二頁)、一九三二年に皇典研究所で行なつた「郷土と神社及び郷土芸術」では「中国の民間神道である陰陽道」(全集ノート六巻二八八頁)といった不用意な発言さえしている。こつした点は当時の限界であるとはいえ、より慎重な態度で陰陽道をとらえたならば、民俗研究における陰陽道の位相も異なつたものになつたのではないかと惜しまれるのである。

折口の陰陽道への関心として、もう一つ重要だと思われるのは長崎県壱岐島におけるフィールドワークである。一九二二年八月に壱岐に渡つた折口はその採訪記録を繰り返し綴つた。そしてそ



の決定版とも言える「雪の島」(一九二七年頃執筆)において、吉岐の「文明」に大きな影響を与えたのは、唱門師、盲僧、流人の三つであるとし、唱門師を僧形の陰陽師としている。そして吉岐にあつては「唯今の島の社々の昔の神主は、凡、陰陽師であつて、裕福なる者は、吉田家の免許状下附を願つて、(神職と引用者注)両様の資格を持つてゐた。(中略)陰陽道では、職神^{シキシン} 即、役霊

の事を、後にみさきとも称へてゐた。処が、吉州に來た陰陽師の徒は、みさきを備ふのに、簡単な方便があつた。其は、やばさと言ふ島に多く居る精霊を、呪力で駆使する事にした。」(全集三卷一一五頁)として近世に吉田家の神官としての職掌も併せ持ちながら陰陽師としても活躍していたことを述べ、さらにヤボサの崇敬が盛んであることが陰陽師の勢力が盛んであつたことを示しているとする。この後、記述は幸若や説経、浄瑠璃などへと進んでいく。陰陽道に関わる部分からみれば、吉岐の民俗文化における陰陽道の影響の発見がなされ、「雪の島」という論考に結実したのだともいえる。折口の文学発生論や芸能史論における陰陽道の位置はこうした実際の調査による裏付け、もしくはきつかけがあつたことは注目されてよい。折口の陰陽道観はその点では柳田の場合とは異なつて、ある地域における調査から導かれたものであつた。

以上の検討から折口信夫の民俗研究においては、柳田と同様に陰陽道の規定については問題があるものの、文芸や芸能の担い手折口流に言えば発生に関わる人びととして陰陽師に長く着目
がなされていたことが判明した。また、宮廷で行なわれた陰陽道以外に寺院を核として行なわれた陰陽道があることが指摘され、

その影響が仏教を媒介に民俗事象へも及んでいるだろう、という見通しを得ることができた。なお、こうした折口の見解の背後には吉岐における調査経験があり、その整理検討からこうした位置づけが導かれたということも注意しておく必要があるように思われる。

三 戦後の陰陽道研究の動向

柳田、折口によつて拓かれ、規定された民俗研究における陰陽道への関心は、戦後の研究ではどのように継承されたのであろうか。それを考える際に、第一に挙げるべきなのは堀一郎の研究である。堀は『我が国民間信仰史の研究』(全二巻、東京創元社、一九五三―五五)の特に第二巻宗教史編の第四部第九編「近世特殊民の呪術宗教的機能」の第三章において、陰陽師と唱門師を取り上げ、続いて第四章では院内、さんじよ等に言及している。柳田、折口の視点を受け継ぎ、さらに史資料を博搜して信仰史のなかに陰陽道を位置づけようと試みたものである。ここでは陰陽師や陰陽道に関わつた人々の様態や職能についての検討や位置づけが述べられているが、陰陽道の知識や陰陽師の組織などを考究するものではなかつた。民俗研究の立場からは田中久夫の播磨国における陰陽師の活動を史料を用いて検討しようとする研究⁽²⁾や小松和彦による高知県物部村のいざなぎ流をめぐる研究⁽³⁾など陰陽師の活動や陰陽道そのものの存在を前提にした検討が積み重ねられてきた。

ところが、一方で陰陽道史研究が、一九八〇年代以降、急速に



整備され進展しはじめた。即ち、村山修一は『日本陰陽道史総説』

(一九八一、塙書房)ではじめての陰陽道通史を学界に提供した。これと後に一般書としてその後の研究も取り入れた『日本陰陽道史話』(一九八七、大阪書籍)が、現在のところ陰陽道の史的展開を概観するために必須のものとなっている。ただし、村山の通史的な記述は中世までが比較的多様な方面まで広く目配りがなされているのに対して、近世以降の叙述は手薄な観が否めない。その欠は遠藤克己の『近世陰陽道史の研究』(一九八五、未来工房、のちに増補新訂して一九九四、新人物往来社より刊行)が補っているが、この浩瀚な記述は土御門家の日次記を主たる史料としており、近世期に陰陽道に携わる人々を統括した土御門家の動向とその職掌については詳細であるものの、地方における陰陽師の活動や他宗教との交渉、陰陽道に端を発する知識の位相などについては叙述が及んでいないうらみがあつた。特に庶民生活との接点あるいは民俗事象との関わりについては十分な検討が加えられてはいない。

また中村璋八の『日本陰陽道書の研究』(一九八五、汲古書院)は日本において成立した陰陽道書六種について校訂を行い、問題点を指摘したものである。この刊行によって、陰陽道の知識や祭式さらにそれらを支える思想が集成され、容易に参照できるようになったという点で画期的なものであつた。さらに、ベルナル・フランクの『方忌みと方違ひ 平安時代の方角禁忌に関する研究』が一九五三年にフランスで刊行され、邦訳は著者自身による改訂増補を加えて一九八九年に岩波書店から刊行された。先駆的な斎藤励の研究に加えて、平安期の陰陽道の知識と実践とを考究

する重要なものである。

こうした研究環境の整備が進展するなかで、決定的な研究の集成が、村山修一ほかの編による『陰陽道叢書』(全四巻、名著出版、一九九一―一九九三)である。ここでは詳細な文献目録が第四巻に付されているほか、古代から近世までの時代区分に沿って、宗教史のみならず、陰陽道を扱った主要な論文が広範な範囲から再録されている。各巻には総説と論文の解題、関係論文の紹介や位置づけが行われており、今後の陰陽道の研究に益することはかり知れないと思われる。

さらに『陰陽道叢書』前後からの陰陽道研究の進展を概観して、特に民俗研究と関わる部分を考慮しながら、今後の課題を模索してみたい。まず、取り上げておくべき問題は陰陽道とは何か、という対象の定義である。この問題は簡単なようである、明解な解答はかなり難しい。戦前の斎藤励をはじめ、柳田国男、折口信夫さらには戦後も村山修一らが、中国から陰陽道が移入されたかのようにとらえているのは、厳密には問題が多い。ともに陰陽五行説を重要な要素とする道教との差異や中国の習俗との違いが不明瞭になってしまつからである。一方、野田幸三郎や小坂眞二らは陰陽道は日本において成立したものだという見解に立っていた。この点については山下克明が、古代社会における陰陽道を中心に関連する天文道、宿曜道などを全体的に検討する『平安時代の宗教文化と陰陽道』(一九九六、岩田書院)において陰陽道の語は十世紀以降に一般化する語であり、陰陽道はあくまでも律令制下における陰陽寮の職務を中心に考え、その後の変転をとらえていくべきであるとした。このように考えることによって、中国におけ



陰陽思想や道教の展開とは別の日本の文化史における陰陽道の成立や展開をとらえる礎石がすえられたと言えよう。

民俗研究の立場からは、古代社会のなかで成立した陰陽道が、中世以降、その担い手を広げながら変転を重ね、庶民生活に影響を与えていく場面をとらえる必要がある。その際には、古代から中世にかけて制作された陰陽道書が一種の典拠あるいは規範になるものと考えたい。古く『令義解』雑令の秘書玄象の条に天文、陰陽の書や占書などが国家の管理のもとに置かれるべきことが述べられているように、陰陽道に集約され、やがて拡散していく知識はまずもって、書物の形で集積されていたのであった。古代社会でもそうした傾向は続き⁽¹⁾、絵巻物などに描かれる陰陽師像もまた、書物を伴うものが少なくない。もちろん陰陽師たちが、実際に執行したさまざまな儀礼や呪占の内容は全て文字に残されていないわけではなく、そうした実践の様相にも注意をはらうていかねばならない。それでもなお、中世以降の担い手が多様化した陰陽道を考える際に、日本で成立した陰陽道書に注目する必要性は大きいものと考えられるのである⁽²⁾。

陰陽師の存在形態に関する研究も大きな進展をみせている。古代社会における生活や政治の現場において陰陽師とかれらの活動がどのような意味を持っていたかについての詳細な検討がなされるようになってきている⁽³⁾。中世においても鎌倉幕府、室町幕府における陰陽師の登用とその意味については王権論などと絡んで刺激的な研究が提出されている⁽⁴⁾。近世における陰陽師の活動とその組織については、土御門家が支配体制の確立、維持を模索する過程での種々の争論や幕藩権力との関わりに関する検討が進んでい

る。さらに近代における陰陽師の動向も明らかとなった⁽⁵⁾。こうした古代以降の陰陽師研究の深まりのなかで、民俗研究と関わりが深いのは近世以降の実態である。既に林淳が幕末期の土御門家配下の陰陽師の全体像を把握しつつあり、特定の陰陽師の日記の分析も行なっている⁽⁶⁾。これらによって他宗教に属する人々との相互交流や村落における位置なども明らかにしていくものと思われる。陰陽師の史実的実像がこのように明らかになっていくなかで、陰陽師とそれに類する宗教者たちが、どのような知識を操り、庶民生活に影響を与えていたのかについては、民俗事象の入念な検討を行い、さらにそれを時間軸のなかに位置づけていくことが求められよう。

なお、民俗事象のなかでも俗信やまじない、占いの領域においては、陰陽道の影響が大きいのではないかと、という予測がされてきたが、具体的な検討は充分に行なわれてはいない⁽⁷⁾。陰陽道の流れを組む宗教的な儀礼や祭文についての考察については、先に触れたように小松和彦が、いざなぎ流の祭文研究を進めているが、高木啓夫もいざなぎ流の祈祷の全容をとらえようとする大著『いざなぎ流御祈祷の研究』(一九九六、高知県文化財団)を問うている⁽⁸⁾。さらに安倍晴明伝説を中心に民俗事象から陰陽師の活動の実態を精力的に追究している高原豊明は『写真集安倍晴明伝説』(一九九五、豊喜社)を既に刊行し、一定の成果を挙げた後、さらに徹底した調査研究を継続している⁽⁹⁾。こうした動向をもふまえて、民俗的陰陽道研究はどのような視点が有効であろうか。次節ではそれを述べて小括としたい。

四 小括―民俗的陰陽道研究の方法

これまで確認してきたように、民俗研究、特に柳田國男と折口信夫のそれにおいては陰陽道は中心的な命題にはならなかった。しかし、陰陽道がいくつかの担い手によって展開したこと、特に、陰陽師以外の宗教者の知識や実践の中に流入し、行事や儀礼、芸能などに影響を及ぼしていることは繰り返し論及されていたのである。さらにその後の研究の進展のなかでも、陰陽師の実像や組織などが格段に精度を増しつつ解明されるようになってきている。

以上のような研究史の把握によって、今後追究すべき課題と方法とが析出されてくる。まず、陰陽道に端を発したり、関連するとされる知識の形態を民俗事象のなかから見だし、その位相を明示することが必要であろう。そのためには陰陽道とそれにつながる知識とはどのようなかを信頼できる史資料に即して確定しなければならぬ。民俗文化と関わりの深い時期を意識して、大まかに設定するならば、中世末以降の陰陽道が対象となるであろう。この時期以降の陰陽道の知識は、書物の形でまとめられていることが多い。従って、この時期までに成立している陰陽道書とその内容の変遷、流通と受容とがまず、明らかにされねばならない。現実の陰陽師や陰陽道の知識を用いて活動した宗教者を把握するためには、こうした書載の知識に注目する必要がある。さらに近世社会における識字率の向上、出版技術の発達、流通網の整備などを勘案して、陰陽師に限定されない、陰陽道の流通や発展をとらえていくことが求められよう。

つまり、民俗研究の立場から陰陽道を考察していくためには、まず中世末以降の陰陽道書とその成立及び流通、受容の諸過程に着目し、庶民生活に接する陰陽道の知識を明らかにしていかなければならない。さらにこれを基礎として、次に陰陽道に端を発した知識と民俗事象との関わりを検討していくことが必要である。以上の二つの視座を据えることによって、庶民の生活文化における陰陽道を定位できると考えるのである。今後はこうした視点と方法によって陰陽道に関わる民俗の解明を進めたい。

なお、本稿は、近年、筆者が継続してきている陰陽道の歴史民俗学的研究の序論にあたるものの一部である。また、本稿には平成一〇年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)読書の多様性と伝承の形成に関する民俗学的調査研究¹⁾の成果が含まれていることを付記する。

註

(1) 『王朝時代の陰陽道の三度の刊行について書誌的な事項を記しておこう。最初に刊行されたのは大正四年(一九一五)二月一日、甲寅叢書刊行所より甲寅叢書第六編としてである。扉に初版五百部と記されている。口絵に著者の肖像写真、その裏に「故文学士斎藤勲君小伝」が掲げられている。序文(三頁)は亀井高孝、凡例(二頁)にも校訂者として亀井の名が記されている。跋文(三頁)は関世男による。奥付に記された発行者は柳田國男で、甲寅叢書刊行所と柳田の住所とは同一である。取次発売所として郷土研究社が記載されている。

二度目の刊行は日本文化名著選の一冊として創元社より昭和二三

年二月二十五日発行。巻頭には肖像写真に代わって、第一章の原稿が写真で掲げられている。再版序言(四頁)は関世男によるもので、再版計画が戦時中からあったことや本書のもととなった卒業論文の審査にあたったと思われる田中義成の評言などが紹介されている。奥付には校訂者として著者の名に並んで関世男の名が記されている。

三度目に刊行されたのは昭和五一年六月二〇日、藝林舎からである。扉の裏に甲寅叢書の肖像写真の裏に付されていたのと同内容の「故文学士斎藤励君小伝」が掲げられ、以下、甲寅叢書版と同様の序と凡例及び跋がある。奥付には発売所として新宿区西早稲田の五十嵐書店が記載されている。

(2) 以下の柳田国男の論考の引用は全て『定本柳田国男集』(筑摩書房)に拠るものとし、引用文は引用のうちに定本の巻数と頁とを(巻数、引用頁)として示すこととする。なお、引用に際しては漢字は通用のものに改め、仮名遣いは原文のままを原則とした。

(3) アリマサについては拙稿「博士とアリマサ 北奥羽の陰陽道系宗教者像」(『青森県史研究』二号、一九九八、青森県史編さん室、六一―八頁)参照。

(4) 以下、折口信夫の論考の引用は『折口信夫全集(旧版)』(折口信夫全集ノート編)(ともに中央公論社)に拠るものとし、引用文は引用のうちに全集もしくは全集ノート編の巻数と頁とを(巻数、引用頁)として示すこととする。なお、引用に際しては漢字は通用のものに改め、仮名遣いは原文のままを原則とした。

(5) この間に伏在する問題については拙稿「折口民俗学の可能性」(古代研究)前後を中心として「(『国立歴史民俗博物館研究報告』三四集、一九九一、国立歴史民俗博物館、八七―一〇九頁)で論じた。特に九一―九三頁を参照。

(6) 杵岐の宗教者の現様については福島邦夫に詳細な調査研究があ

る。福島邦夫「北部九州及びその離島におけるシャーマンの職能者の研究」(平成二年度科学研究費補助金(一般研究)(C)研究成果報告書、一九九一、長崎大学教養部)、同「杵岐における民間宗教者の研究」(『長崎大学教養部紀要(人文科学篇)』三三巻一号、一九九二、一一―一二五頁、長崎大学教養部)を参照。

(7) 田中久夫「年中行事と民間信仰」(一九八五、弘文堂)、同「仏教民俗と祖先祭祀」(一九八六、神戸女子大学東西文化研究所)など。

(8) 小松和彦「憑霊信仰論 妖怪研究への試み」(一九八二、伝統と現代社、のちに増補して一九八四に、ありな書房から刊行)など。

(9) 野田幸三郎「陰陽道の成立」(一九五二、『陰陽道叢書(第一巻)』に再収、六一―八一頁)、小坂眞二「陰陽道の成立と展開」(『古代史研究の最前線(第四巻)(文化編)』下、一九八七、雄山閣出版、所収、一四七―一六三頁)など。

(10) 佐伯有清「八世紀の日本における禁書と叛乱」(同『日本古代の政治と社会』、一九七〇、吉川弘文館、所収、一四五―一七八頁)

(11) 山下克明「陰陽道の典拠」(同『平安時代の宗教文化と陰陽道』、一九九六、岩田書院、所収、六三―九七頁)参照。

(12) この点に関連する業績としては先に本文中で挙げた中村璋八「日本陰陽道書の研究」のほか、下出積興校注『神道大系 論説編十六 陰陽道』(一九八七、神道大系編纂会)、村山修一編『陰陽道基礎史料集成』(一九八八、東京美術)、鈴木一馨「京都市大將軍神社所蔵『皆川家旧蔵資料』について」(大東文化大学東洋研究所編『年代学(天文・暦・陰陽道)の研究』、一九九六、大東文化大学、所収、三六三―四三三頁)などがある。

(13) 繁田信一「平安中期貴族社会における陰陽師 とくに病気をめぐる活動について」(『論集』一八、一九九一、印度学宗教学会、一七頁)、中島和歌子「院政期の出産・通過儀礼と八卦」(『風俗』一一五、一九九三、日本風俗史学会、二二―五頁)、米井輝圭「公事

と禁忌」(『日本思想の地平と水脈』河原宏教授古稀記念論文集、一九九八、ベリカン社、四五七 四八〇頁、所収) など。

- (14) 金沢正大「北条氏執権体制下に於ける関東天文・陰陽道」(『政治経済史学』一一一、一一三、一九七五、政治経済史学会、一一三、六一六、一四二二頁)、柳原敏昭「室町政権と陰陽道」(『陰陽道叢書(第三巻)』、一九九三、名著出版、一二三 一五九頁、所収)、同「応永・永享期における陰陽道の展開」(『人文学科論集』三五、一九九二、鹿児島大学法文学部、八五 一二七頁)、同「安倍有世論」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』、一九九四、吉川弘文館、二四九 二八二頁、所収)、伊藤喜良「日本中世の王権と権威」(一九九三、思文閣出版) など。

- (15) 林淳「陰陽師と神事舞太夫の争論」(『人間文化』八、一九九三、愛知学院大学人間文化研究所、一一二頁) など。

- (16) 高埜利彦「近世陰陽道の編成と組織」(同『近世日本の国家権力と宗教』、一九八九、東京大学出版会、一三五 一二一頁、所収)

- (17) 木場明志「明治以降の土御門系陰陽師」(『宗教民俗研究』二、一九九二、日本宗教民俗学研究会、一五 二八頁)、同「近代における陰陽師のゆくえ」(『大谷学報』七五 三、一九九六、大谷学会、一四 二七頁)

- (18) 林淳「幕末の土御門家の陰陽師支配」(『人間文化』九、一九九四、一九 五八頁、愛知学院大学人間文化研究所)、同「幕末の土御門家の陰陽師支配(二)」(『人間文化』一二、一九九七、一五 六二頁)、同「指田日記」から見た村の陰陽師」(『人間文化』一一、一九九六、一九 三三頁) ほか。

- (19) 奥野義雄『まじない習俗の文化史』(一九九七、岩田書院) は考古資料や文献資料を視野に入れながら呪符や行事を考察したものである。また近現代における占いを宗教学的にとらえ、重要な論点を展開している論考として鈴木健太郎「占いの諸類型とその特質 現代

日本の占い本を通して」(『宗教と社会』創刊号、一九九五、「宗教と社会」学会、五 二八頁)、同「占い本と近代 商品化された知の権威をめぐる」(島園進・石井研士編『消費される 宗教』、一九九六、春秋社、二二〇 二四七頁、所収) がある。

- (20) なお、いざなぎ流の研究のなかで注目された式神についても古代社会における検討が提出されている。鈴木一馨「式神の起源について」(『宗教学論集』二〇、一九九八、駒沢宗教学研究会、四九 六六頁) 参照。

- (21) 『写真集安倍晴明伝説』に掲げられた論考群以外にも高原豊明「上原太夫 土御門家・池田藩との関係について」(『宗教民俗研究』四、一九九四、日本宗教民俗学研究会、七七 九六頁)、同「安倍晴明伝説 『籬簾抄』における晴明常陸出生説の背景及び『籬簾内伝』の東北伝播について」(『伝承文学研究』四七、一九九八、伝承文学研究会、四八 五九頁) などがある。